

# 歴史政治教育のためのNSドキュメンテーションセンター —ドイツにおける歴史教育の展開に着目して—

今 泉 尚 子

## 1. 問題の所在

ナチズムの過去に真摯に向き合うドイツというイメージが日本に定着して久しい。実際、ドイツには、ナチスによる犠牲者を想起する場（Erinnerungsorte）が多数存在する。連邦政治教育センターのホームページには、ナチスによる犠牲者を想起する場を提供している施設及び団体についてのデータベース（Erinnerungsorte für die Opfer des Nationalsozialismus）が設けられており、そこには、2022年1月の時点で456の施設・団体の情報が登録されている<sup>(1)</sup>。

想起の場には、追悼施設、追悼碑、慰霊碑、博物館などのカテゴリーが存在するが、その中で、本稿で注目したいのが、ドキュメンテーションセンターである。

ドキュメンテーションセンターとは、その名の通り「ある出来事やそのプロセス、展開に関する文書を保存、管理することを主な活動とする機関」<sup>(2)</sup>を指し、日本語では「文書センター」や「記録センター」などと訳される。ドイツには、今回扱うナチズムに関するものだけでなく、難民、シンティ・ロマ、東ドイツの日常生活など、現代史に関する様々なテーマに関係するドキュメンテーションセンターが存在する。それらに共通するのは、文書を保管、整理するだけでなく、文書の展示を中心に、教育施設としての役割を期待されていることである。このような教育施設としての機能を正面から打ち出すドキュメンテーションセンターは、今日の世界において未だ一般的なものではなく、先進的な事例と言えるかもしれない。

今回注目するNSドキュメンテーションセンターは、ナチズムの歴史をテーマとする教育施設であり、特に近年ドイツ各地で設置が進みつつある（なおNSはNationalsozialismus（ナチズム）の略）。資料の管理だけでなく、資料の公開、資料を中心とするナチに関する展示、市民向けワークショップ、学校向けのワークショップ、教員研修など教育活動の提供を行っている。

NSドキュメンテーションセンターと名付けられた施設は、2024年1月現在、ケルン、ミュンヘン、オストホーフエンの3箇所にある。また、上述のデータベースには載っていないが、2025年3月にフライブルクにも新しいセンターが設置される予定である。

本稿は、現時点で開館している3つのNSドキュメンテーションセンターを対象とし、その設立が意味するところを考察することを主な目的とする。またNSを冠しないドキュメンテーションセンターは、先述のデータバンクに7つほど登録されているが、紙幅の都合上、これらについては補足的

に扱うこととする。なお、ここで注意しなければならないのは、各地のNSドキュメンテーションセンターは、それぞれ独自の組織を持ち、これまで異なる展開をしてきたのであり、共同運営をしているわけではないということである。

これらのNSドキュメンテーションセンターは、いわゆる追悼施設よりも歴史が浅く、またモノではなく文書の展示を通して、歴史政治教育（*historisch-politische Bildung*）機関としての役割を果たすことがより強く求められている。歴史政治教育とは、政治教育と歴史教育を結び付けたものである。そこでは、過去の事象を歴史として学ぶだけでなく、過去に対する批判的なアプローチを通して現在における自由民主主義の価値を学ぶことが重視される。

若干の研究がすでにドキュメンテーションセンターに言及しているが、それらはセンターを追悼施設や博物館と同じように、想起ないし記憶の場の一つとして扱っており、そこで想定されている政治教育的機能は副次的なレベルにとどまる。例えば安川は、ベルリンにあるドキュメンテーションセンター〈テロルのトポグラフィー〉を、ベルリンのユダヤ博物館やドイツ歴史博物館などと同じく「記憶の場」の一つとして、展示方法に着目して分析しているが、そこには政治歴史教育という視点は見られない。なお安川は、〈テロルのトポグラフィー〉の計画が80年代に具現化したことを指摘しているが<sup>(3)</sup>、70～80年代という時期は、他の西ドイツにおけるドキュメンテーションセンターにとっても、その設置にむけた議論がスタートする時期であった。それは同時に、歴史教育のなかに歴史政治教育という新しい領域の形成が進んだ時期にあたっている。

以上のような基本的な認識に立ち、本研究では、まず戦後ドイツにおける歴史教育の発展過程を概観し、そのうえで先述の3つのNSドキュメンテーションセンターの設置過程とその背景を明らかにすることで、センターが歴史政治教育の役割を担うに至った社会的経緯を確認したい。

## 2. 西ドイツにおける歴史教育学から歴史政治教育への発展

本節では、予備的な作業として、戦後ドイツにおける歴史教育の展開を川喜田の『ドイツの歴史教育』<sup>(4)</sup>をもとに、また歴史政治教育についてはランゲ（Dirk Lange）の論考「政治の歴史と歴史の政治のあいだ—歴史政治的学習の基本形態」<sup>(5)</sup>をもとに本稿に必要な範囲で概観する。

今日のドイツ・イメージのもとにある、ナチ時代について正確かつ詳細に伝えるための教育制度と教材が作りあげられたのは、基本的に60年代後半から70年代にかけてのことであった。それ以前は、ナチの過去は歴史の授業で扱うにはあまりにも時間的に近すぎるとされ、ナチズムに関わるテーマが授業で扱われることは、むしろ稀だったと考えられている。ここには、当然、当時の社会の風潮も影響しているが、それだけでなく、歴史教育の目的を人格形成にみる教育観も影響していたと考えられる。

そうしたなか、第一の転機となったのが、1960年前後の若者を中心とする反ユダヤ主義的行為である。1959年から1960年には、右翼の若者によるユダヤ人墓地荒らしやハーケンクロイツの落書きが広がり、国際的な非難を浴びるに到った。

これを受け、1960年頃からナチズムの歴史を積極的に教えることが行政サイドから求められるに至ったが、まさにこのような動きが、教員や市民のあいだから広がったというよりも、まずは西方統合推進の方針のもとで反共政策を進めていた政府のイニシアティブによるものだったことを確認する必要がある。

そして、こうした環境下で大きな転換が生じることになる。すなわち、今日、クス（Horst Kuss）やリュゼン（Jörn Rüsen）などの歴史教育学者は、ドイツの歴史教育と歴史学の転換点を1970年代に見ている。この頃、歴史的事象を学ぶだけでなく、それをもって現在との関係性を考えることを重視する歴史教育学（Geschichtsdidaktik）が確立された<sup>(6)</sup>。その端緒の1つとして言われているのが、クーン（Annette Kuhn）の1974年に初版が出版された『歴史教育学』である。この本では、ドイツで初めて政治的・社会的問題を取り上げ、歴史を反省的に学ぶ方法が具体的に紹介された<sup>(7)</sup>。

このような歴史教育学の確立には、歴史学や歴史科が危機に直面していたという背景が存在する。1950年代後半から歴史学の危機に関する出版が続いていた。歴史学者のコゼレック（Reinhart Koselleck）は、1970年の歴史家大会で「学校での歴史の授業や大学での歴史の講義が退屈であること、また歴史研究が現実社会に十分に還元されていないことから、歴史に拒否反応が生じるのは自明であろう」<sup>(8)</sup>と述べている。当時、学校教育における歴史は、歴史研究の成果とされる「史実」を教えることに主眼が置かれ、教育方法の妥当性についての考察が不足していた。

こうしたなかヘッセン州では、歴史科を廃して社会科を設置することが検討された。1972年には「ヘッセン州社会科教育大綱（Hessische Rahmenrichtlinien für Gesellschaftslehre）」が発表され、ここでは「歴史は、歴史的事象を現在の政治・社会問題との関係性から見ることで、その正当性を獲得する」と記された。この大綱は大きな波紋を呼び、歴史学者やのちに歴史教育学者と呼ばれる人たちに、新しい歴史教育のあり方について考える契機を与えた。つまり、彼らは、歴史科を存続させるために、歴史教育の文脈で、のちの歴史政治教育となる、歴史教育と政治教育を統合させたモデル構築を試み始めたのである。

結果的に歴史科が社会科に統合されることはなかったが、そこに見られる歴史教育論は今日に至るまでドイツの歴史教育を支えてきたと考えられる。実際、1970年～1980年にかけて、コゼレックやモムゼン（Hans Mommsen）などの歴史家や、ヤイスマン（Karl-Ernst Jeismann）などの歴史教育学者が、歴史教育と政治教育の統合のあり方をめぐって研究を進めた<sup>(9)</sup>。

なお厳密には、1970～80年代には、まだ歴史政治教育という言葉そのものは使われていない。その言葉がドイツで定着するのは1990年代以降のことである。そこには、70年代に始まる問題意識が、統一以後のドイツにおいて一層その重要性を高めたことが推測される。こうした時代背景もドキュメンテーションセンターの設置状況について考える上では重要な意味を持つ。

### 3. NSドキュメンテーションセンターの設立背景とその概要

本節では、3つのNSドキュメンテーションセンターの概要と設立背景を概観する。

具体的には、機関ごとに①それぞれが掲げる目標を、センターのHPをもとに確認する。そして②各センターの設立背景を概観し、そのうえで③各センターの運営組織において、どのくらい政治教育及び歴史政治教育の専門家が携わっているかを示す。この分析から、記録と記憶を残すだけでなく、より積極的に政治教育上の課題を意識してセンターが設置される過程を見ていく。

なお、第1項で扱うケルン及び第3項で扱うミュンヘンのNSドキュメンテーションセンターの設立背景については詳細な資料を見つけることができなかったが、第2項で使うオストホーフエンの例については、設置時にかかわった団体が、設置に至る過程の記録を公開していることから、設立背景に関する分析は同センターを中心に進めることとする。

#### 3.1. ケルン市NSドキュメンテーションセンター EL-DEハウス

- 所在地：EL-DEハウス（ゲスターポ・ケルン本部）
- 運営組織：ケルン市
- 設立年：1987年

##### 3.1.1. 目的

現在のケルンのNSドキュメンテーションセンターは「追憶の場」「学習の場」「研究の場」の3つの場を提供することをその目的としている<sup>(10)</sup>。元ゲスターポの監獄であったということから、追悼施設という役割を果たしながら、学校の授業の一環としてのワークショップや、市民が誰でも参加できるワークショップを提供している。そして、ドキュメンテーションセンターとして、資料の管理及び調査も行われている。

##### 3.1.2. 設立背景

EL-DEハウスは、元々の所有者である金・時計商レオポルド・ダーメン（Leopold Dahmen）によって建設された。1934/35年の建設当初は住宅兼店舗ビルとして使用されていた。

しかし、まだ完成していなかったこの建物を1935年の夏にナチスが接収した。もともとあったテナント契約は破棄され、国家が借主となった。ちなみにダーメンはいわゆるユダヤ人だったわけではなく、カトリックを信仰していた。街の中心部に位置し、裁判所や警察に近いこの建物は、ゲスターポにとって最高の立地であった。金庫として使われる予定だった地下部分は牢屋となり、住居部分はゲスターポのオフィスとなった。

1945年3月6日にアメリカ軍が市内に進軍する数日前、3月2日にこの建物はゲスターポのオフィスとしての役割を終えた。ケルン市内のほとんどの建物が焼失したにも拘わらず、この建物は残った。

戦後は、テナントとしてケルン市が使用し、年金事務所などが入っていたが、1979年12月13日、ケルン市議会は、EL-DEハウスの地下室をナチズムの犠牲者に関する情報センターとして改修し、

建物の外壁に記念プレートを設置するだけでなく、ナチ時代に関するドキュメンテーションセンターを設立することを決定した。なお、議会は記念プレートの設置だけでは十分ではないことを認識していたが、実際にこの決定後にセンターが設立されることはなく、ナチ時代のケルンについて調査・資料収集するためのポストが一つ、ケルン市歴史資料館に補充されただけの状態が続いた。

そうしたなか市民のあいだからドキュメンテーションセンターの設置を求める声が上げられるに至る。1985年、熱心な市民グループが集まって「NS ドキュメンテーションセンター設立のためのイニシアティブ」を結成し、デモを行った。そうした動きを受け、1987年、ケルン市議会は、本格的な展示施設としての市立ドキュメンテーションセンターの設置を可決した。とはいえ、このときも、当初は、EL-DEハウスの1階に事務所が設置され、2階に小さな図書館とワークショップ用の部屋が設置されただけであった。実際に常設展示が設けられたのは1997年6月のことである。

### 3.1.3. 運営組織の構成について

1987年の設立時には市の文化局直属の施設であったが、現在は、ケルン市博物館連盟の一部である。当時は、研究者と事務職員それぞれ2名ずつしか配置されていなかったが、現在は、総勢30名以上を擁しており、うち、反ユダヤ主義を専門とする政治学者や、政治教育学を専門とする研究者が3名、運営に従事している。

## 3.2. NS ドキュメンテーションセンター・ラインラント＝プファルツ

- 場所：オストホーフエン強制収容所跡地
- 組織：ラインラント＝プファルツ州立政治教育センター
- 設立年：2004年

### 3.2.1. 目的

本センターは、3つの目的を掲げている<sup>(11)</sup>。1) 政治教育に不可欠な追悼事業、2) 追悼と想起、そして3) 過去への反省と現在とを関係づけることである。

1) については、オストホーフエン強制収容所を中心とした歴史に関する情報提供である。歴史的事象やその背景を、ナチスの非人道性が示された場で学ぶ機会を提供することを目的としている。2) については、ナチ政権による犠牲者を追悼し、想起する場としての役割である。これは、このNS ドキュメンテーションセンターの設置が、元強制収容所の収容者の記憶を残すという動機から出発していることに起因している。このセンターの大きな特徴は、追悼や想起を来館者に強制するのではなく、様々な視点からの情報提供と対話を通して、より多元的で深い理解を生み出すことを主眼に置いていることである。そのため加害者サイドにあたるこの強制収容所の政策や行政にかかわった政治家や公務員の視点も学ぶことができるような展示となっている。そして、3) の「過去への反省と現在との関係」は、民主主義と人権を意識した態度や行動を育成・強化するための政治教育の場の提供である。

### 3.2.2. 設立背景

このラインラント＝プファルツ州のNSドキュメンテーションセンターは、長い年月をかけて強制収容所の追悼記念施設からドキュメンテーションセンターへと変容を遂げた結果として存在する施設である。

これは既述のように、オストホーフエン強制収容所の跡地に建てられた。この強制収容所の建物自体は、もともと製紙工場であったが、ナチ党が政権掌握後、すぐにオストホーフエン強制収容所になり、1933年春から1934年の夏までの17ヵ月間にわたって強制収容所として機能した。その間に、社会民主党员、共産党员、労働組合員などの「政治犯」とされた人たちや、中央党员、シンティ、エホバの証人、ユダヤ人も収容された。ここで、収容者たちは計画的に殺害されることはなかったが、劣悪な環境で非人道的な扱いや虐待を受けた。

強制収容所閉鎖後は、多くの収容者が他の強制収容所に移送された。その2年後、この建物は競売にかけられ、戦中の1936年から1976年まで民間企業の家具工場として稼働した。そして、かつて強制収容所だった過去は忘れ去られていった。

その一方で元収容者たちは、この忘却に歯止めをかけようとした。1961年の時点で、オストホーフエン強制収容所の元収容者たちが、「オストホーフエン強制収容所に収監されていた仲間たち」と名付けた集会を開催した。そして、1972年にはナチ政権被害者協会（VVN-BdA）の支援を受けて、元オストホーフエン強制収容所収容者の団体を結成した。設立式典で、元収容者で、この団体の初代会長を務めたカール・シュライバー（Karl Schreiber）は、次のようにコミュニティの目的を述べている。

このコミュニティの目的と使命は、ナチスによって最初に設立された収容所の一つであるという記憶を保存することです。現在ではほとんど忘れ去られ、アンナ・ゼーガースの世界的に有名な小説『第七の十字架』が唯一の記念碑としてその記憶を後世に残しているにすぎません。ナチスによる過去の不正義を、私たちの祖国、とくにこの地域で決して繰り返してはならないということを、現在も壁が残っているこの旧収容所の地域住民に想起してもらうことが、私たちの目的です。

このように、ナチスの歴史を繰り返さないために後世に記憶を残すということが当初の目的であったことが見て取れる。

その一方で、地域住民の理解は、1970年代の時点では得られていなかった。1972年7月に行われた設立を求める集会に対しては、住民による反対運動も起きている。

1977年には、元収容者団体によってオストホーフエン市議会に、強制収容所の跡地の壁にナチズムの犠牲者のための記念碑を設置することが提議された。そして当時の建物所有者との長い交渉の末、1978年、ようやく記念プレートを設置する許可が得られた。市が管理するこのプレートは50×

50cmと小さく、メインストリートに面していない外壁に設置され、人々の注目を集める記念碑とはとても言えないものだったが、記念碑には「1933-1935年ヘッセン強制収容所オストホーフエン 二度と繰り返さない！元収容者団体」と記された。

1980年代に入ると、元収容者団体だけでなく、様々な団体から旧オストホーフエン強制収容所の跡地を保存、維持することが求められるようになった。その理由の一つとして、この時点で建物の劣化が著しかったことがある。1976年の家具工場閉鎖後はワイン保管倉庫やプラスチックリサイクル倉庫として利用され、粗略に扱われていた。この状況を打開しようとしたのが、労働組合総連合の傘下にある青年会（DGB-Jugend）<sup>(12)</sup>である。彼らは、オストホーフエン強制収容所の跡地を訪れる平和旅行を企画するなど、様々なイベントを行った。1982年9月にDGBラインラント＝プファルツ青年会が行ったイベントでは、元収容者4人の講演が行われ、若者と元収容者が語り合った。そしてそのイベントの最後に、DGPラインラント＝プファルツの会長は、今日のネオナチや外国人排斥に対する抵抗のために歴史を学ぶ必要性を強調した。

ここには、過去の記憶を残すだけでなく、その過去を教訓に現在の問題に取り組もうとする姿勢が明確にあらわれている。

また1986年には、先述の元収容者団体や労働組合の青年団体などの複数団体で「オストホーフエンプロジェクト促進協会」が設立された。その2年後には活動が実を結び、ラインラント・プファルツ州議会が同協会に補助金を交付することを決定し、1988年からは、元収容所の建物の一部を借用して、資料分析などの研究だけでなく、ワークショップの提供などが行われるようになった。そして1989年に実現した初の展示会を訪れた州首相のヴァークナー（Carl-Ludwig Wagner, CDU）は、旧強制収容所跡にある建物および敷地を購入する意向を表明し、1991年に売買交渉が成立した。

1994年にはラインラント・プファルツ州立政治教育センターが資料収集をはじめ、1997年には政治教育センターと同協会との間で協力協定が結ばれ、2002年にNSドキュメンテーションセンターが設立し、2004年に常設展示が始まった。

### 3.2.3. 組織構成について

このセンターの組織構成の特徴は、20人ほどが運営に従事しており、その約2/3が州立政治教育センターの職員であることである。特に歴史政治教育や追悼施設教育の専門家が一名ずつ配置されており、彼らが様々な教育プログラムやワークショップにおいて中心的な役割を果たしている。

## 3.3. NSドキュメンテーションセンター・ミュンヘン

- 所在地：ナチ党本部「ブラウン・ハウス」跡地
- 運営組織：ミュンヘン市
- 設立年：2015年

### 3.3.1. 目的

このセンターによれば、その中心的な関心・課題は、「歴史」を視野に入れて現在を批判的に検証

し、未来について問いかけることである<sup>(13)</sup>。具体的には、強い民主主義とは何か？ 民主主義はどのように弱体化するのか？ 今日、少数派に対する排除や迫害、憎悪や暴力はどこで起きているのか？ 強固で開かれた社会を支える価値観や行動とはなにか？ 私たちはどのような想起を望んでいるのか？ といったことを市民に問いかけることを目的としている。

### 3.3.2. 設立背景

ナチと深いかかわりのある都市ミュンヘンには、以前よりダッハウ強制収容所や白バラ記念館のような追悼施設は存在したものの、加害者を生んだ過去を学ぶ場が欠けていた。

実際にはアメリカ占領期に、今日のセンターの前にあるケーニッヒ広場に記念館を建てる計画があったが、すぐに立ち消えとなった<sup>(14)</sup>。しかし、1988年以來、市民活動家のあいだから、ミュンヘンにナチズムの歴史に対する批判的なアプローチの場を設けようとする活動が広がった。そして1989年には「現代史の家」をナチ党本部が置かれていた「ブラウン・ハウス」の跡地に設置することが構想されたが、これもまたとん挫した<sup>(15)</sup>。1990年代初めによく、ナチ時代に関する個別の展示会やイベントがミュンヘン市主催で行われるようになり、2001年に、ようやくミュンヘン市議会はNSドキュメンテーションセンターを設置することを決議した。設置場所については議論が難航したが、「ブラウン・ハウス」の横に新たに建設されることが決まり、2015年にNSドキュメンテーションセンターが設置された。

### 3.3.3. 組織構成について

この施設では、歴史学者だけではなく、歴史政治教育や極右急進主義を専門とする研究者も運営に参加し、児童・生徒へのプログラムの提供を行っている。

## 4. そのほかのドキュメンテーションセンター

ここまで見てきた3つのNSドキュメンテーションセンターに加えて、冒頭で述べたように「NS」を冠さないドキュメンテーションセンターが7か所ある（表1）。

網掛けした施設が、旧東ドイツ地域に設置されたドキュメンテーションセンターである。これらのセンターは、提案から開館までに要した時間が西側のセンターよりも短い様子が見て取れる。旧西ドイツのセンターに着目してみると、もともとあった追悼施設にドキュメンテーションセンターが後から設置されるケースが多い。なお、ウルムについても1985年に追悼施設として開館しているが、いつからドキュメンテーションセンターとしての機能が追加されたのかは正確に把握することができなかった。また、各地の政治教育センターが運営にかかわっているケースも見て取れる。



表1 NSを冠さないドキュメンテーションセンター

センター名（筆者和訳）	所在地	設置に至る経緯	特徴
州立独裁による犠牲者のためのドキュメンテーションセンター	シュヴェリン： MV州	1998年 センターの設置が決定 2000年 MV州立政治教育センターによる運営が決まる 2002年 センター開設 2005年 常設展開始	ナチ時代の監獄付き裁判所跡地（旧東ドイツ時代の「政治犯」もここに拘留された）
ナチ強制労働ドキュメンテーションセンター ベルリン・シエネヴァイデ	ベルリン（旧東側）	1990年中頃～ 市民団体によって、学習の場として保存するように運動が展開される 2006年 敷地の一部に設置される	旧強制労働収容所
ドキュメンテーションセンター テロルのトボグラフィー	ベルリン（旧西側）	1970年代末 国際建築博覧会が跡地に道路建設することに反対→市民団体による跡地の保護運動 1987年 特別展示会→無期限の常設展示 2010年 センター開館	この敷地は、ゲスターポと親衛隊の司令部の建物に囲まれていた。
オーバーケーベルク-ウルムドキュメンテーションセンター協会 強制収容所追悼施設	ウルム：BW州	1970年代～ ドキュメンテーションセンター設置を求める市民運動 1985年 強制収容所追悼施設として開設→ドキュメンテーションセンターへ	旧要塞を元にした強制収容所跡地
プロラドキュメンテーションセンター	プロラ：MV州	2000年 開館	ナチ党員のための休暇施設になる予定だった施設
党大会会場 ドキュメンテーションセンター	ニュルンベルク：BY州	2001年に設置	<ul style="list-style-type: none"> <li>ナチ党大会の会場</li> <li>BY州立政治教育センター後援</li> </ul>
グラフェネック追悼施設-ドキュメンテーションセンター	グラフェネック：BW州	1990年 追悼施設が設置される 2005年 ドキュメンテーションセンターが追加で設置される	ナチスの記憶を残すだけでなく、戦後どのように想起されたのかについての常設展示がある

（筆者作成）

## 5. 歴史政治教育施設としてのドキュメンテーションセンター

以上、3つのNSドキュメンテーションセンターと、補足的に7つのNSを冠さないドキュメンテーションセンターの概要及び設置背景を見てきた。

組織構成からみると、ほとんどのセンターで歴史学だけでなく政治教育学や歴史政治教育を専門とするスタッフが配置されている。また、各州の政治教育センターがその運営にかかわっている事例も存在する。ここに歴史政治教育機関としてのセンターの特徴が象徴的に表れている。

また、センターの掲げる目的や課題から、それらは単に想起ないし追悼の場としての役割だけでなく、今日の民主主義社会の反例としてナチズムという過去の現象をとらえて学ぶことが明確に意図されている様子がうかがえる。

そのほか設置背景をみていくと、特に西ドイツ地域の場合、ドキュメンテーションセンターの設置では、若者を中心とした市民グループなどのイニシアティブによってボトムアップで設立されてきた点が特徴的である。また、このボトムアップの動きは1980年代に強く起きており、この流れは、当時の反核・平和運動や環境保護を求める市民運動などとも連動していると考えるのが自然であろう。

またドキュメンテーションセンター設置への運動に参加した市民の多くは、学校等でナチズムの過去を現在の問題と結び付けて学んできた世代にあたっている。

このような流れがある一方で、当時は地域住民の反対が強かったことも事実である。このような緊張関係は、当時の激しい保革の対立を考慮するとき、当然のこととも言えよう。また、戦争を経験した世代と経験していない世代との対立を、ここに見ることもできるかもしれない。

そして、ようやく1990年代になると、行政側もこうした施設に対して予算を割くことに積極的な姿勢を示すに至る。このように、ドキュメンテーションセンターの開館までに時間を要した背景には、単に行政手続きが緩慢だったというだけでなく、ドイツ政治における優先順位の問題もあると考えられる。つまり、冷戦体制下で生まれた歴史政治教育の芽は、当初は保守派の壁により成長を阻まれていたが、冷戦終結後、自由民主主義体制への脅威は左側よりも右側に大きく見られるという認識で保守派を含む政治的コンセンサスが成立したことで、開花を見たのである。そこでは、右翼急進主義予防（Rechtsextremismusprävention）という政策的観点から、政治教育関連分野に多額の資金が投入されることになり、各地のドキュメンテーションセンターは、こうした環境下で設置されることとなった。なお、旧東ドイツ地域のドキュメンテーションセンターの設置決定に至るまでの期間が旧西ドイツよりも短いのは、そこには右翼急進主義の拡大という喫緊の課題があり、それゆえ政府に早急な対応が求められていたためと考えられる。かつて西ドイツにおいてボトムアップで時間をかけて進められたプロセスが、統一後は政府により迅速に進められることとなった。

また、特に西側に焦点をしばるとき、詳細に追うことができたオストホーフェンのNSドキュメンテーションセンターの設置経緯から、歴史教育のなかに歴史政治教育という領域が形成される過程を見ることができる。つまり、当初は強制収容所をめぐる記憶を残すことを目的として、旧強制収容所の建物を利用した追悼施設が設置されていた。しかし、その後NSドキュメンテーションセンターが設置されるときには、政治教育的な役割が特に強調して付け加えられたのである。

最後に、こうした展開には批判もあることを確認して結びとしたい。歴史を政治教育的に民主主義の価値に基づいて見るることについて、歴史学者でブーヘンヴァルト強制収容所記念館の所長を務めたクニッゲ（Volkhard Knigge）は、それを「歴史的事実が持つ意味の可能性を狭め、歴史を週及的に理解することにつながる」、「（歴史を特定の価値で判断することは）支配的な目的のために固定化することであり、自由と責任を停止させる政治的あるいは道徳的なテロスをもたらす」と指摘している<sup>16)</sup>。これは歴史家として当然の懸念と言えよう。

ただ、こうした疑問を抱えながらも、各地にNSドキュメンテーションセンターが建設され、歴史政治教育が日々進められているところには、そもそも歴史理解を固定化する危険があるとされる政治体制ないし政治的価値の方が揺らいでいるのが現実であり、その危険の方が深刻であるとの認識があるものと推測される。この点についての確認は今後の課題としなければならないが、いずれにせよ、歴史政治教育やNSドキュメンテーションセンターが、ドイツのみならず今日の世界における歴史と政治の関係を考える上で重要な存在であるのは間違いないと思われる。

本研究を進めるにあたっては、DAAD 早稲田大学パートナープログラム (2022-24) Remembering the war – How museums and memorials resonate with the youth in Tokyo and Munich の助成を受けている。

- 注(1) Bundeszentrale für politische Bildung: „Erinnerungsorte für die Opfer des Nationalsozialismus“, <https://www.bpb.de/themen/holocaust/erinnerungsorte/>, [最終閲覧 2024 年 2 月 24 日]。実在する追悼施設だけでなく、オンライン上の追悼展示等も検索できる。
- (2) DWDS: <https://www.dwds.de/wb/Dokumentationszentrum>, [最終閲覧 2024 年 2 月 24 日]。
- (3) 安川晴基 (2012) 「ミュージアムと集合的記憶のマッピング：ドイツ歴史博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、記録センター〈テロルのトポグラフィ〉」『19 世紀学研究』6, 3-21 頁。
- (4) 川喜田敦子 (2005) 『ドイツの歴史教育』白水社。
- (5) Lange, Dirk (2004): Zwischen Politikgeschichte und Geschichtspolitik. Grundformen historisch-politischen Lernens, URL: [https://www.sowi-online.de/reader/historische\\_politische\\_bildung/lange\\_dirk\\_2004\\_zwischen\\_politikgeschichte\\_geschichtspolitik\\_grundformen\\_historisch\\_politischen.html](https://www.sowi-online.de/reader/historische_politische_bildung/lange_dirk_2004_zwischen_politikgeschichte_geschichtspolitik_grundformen_historisch_politischen.html), [最終閲覧 2024 年 5 月 16 日]。
- (6) Kuss, Horst (1994): „Historisches Lernen im Wandel. Geschichtsdidaktik und Geschichtsunterricht in der alten und neuen Bundesrepublik“, *Aus Politik und Zeitgeschichte*, 41/1994, Bonn: Bundeszentrale für politische Bildung, URL: <https://www.bpb.de/shop/zeitschriften/apuz/archiv/537098/historisches-lernen-im-wandel-geschichtsdidaktik-und-geschichtsunterricht-in-der-alten-und-neuen-bundesrepublik/>, [最終閲覧 2024 年 3 月 26 日]。
- (7) Buck, Thomas Martin (2023): Erkenntnis und Interesse Zu Annette Kuhns „Geschichtsdidaktik in emanzipatorischer Absicht“ (1974), S. 94; In: van Norden, Jörg u. Yildirim, Lale (2023): *Historisch-politische Bildung im Diskurs: Perspektiven der Geschichtsdidaktik*, Frankfurt/M: Wochenschau.
- (8) Buck (2023): S. 95; zit. nach: Reinhart (1979/1990): Wozu Historie? In: Hardtwig, Wolfgang (Hg.): *Über das Studium der Geschichte*. München, S. 347.
- (9) Vgl. Mommsen, Hans (1973): Die hessischen Rahmenrichtlinien für das Fach „Gesellschaftslehre“ in der Sicht des Fachhistorikers. In: Köhler, Gerd u. Reuter, Ernst (Hg.): *Was sollen Schüler lernen? Die Kontroverse um die hessischen Rahmenrichtlinien für die Unterrichtsfächer Deutsch und Gesellschaftslehre*. Frankfurt a. M; Koselleck, Reinhart (1972): Über die Theoriebedürftigkeit der Geschichtswissenschaft. In: Conze, Werner (Hg.): *Theorie der Geschichtswissenschaft und Praxis des Geschichtsunterrichts*. Stuttgart; Behrmann, Günter C., Jeismann, Karl Ernst, Süßmuth, Hans (1978): *Geschichte und Politik. Didaktische Grundlegung eines kooperativen Unterrichts*, Paderborn.
- (10) 以下のケルン市 NS ドキュメンテーションセンター EL-DE ハウスについての記述は、特にことわりのない限り、著者が現地を訪れて確認した事実と次のウェブサイトの情報に基づいている。NS-Dokumentationszentrum der Stadt Köln: <https://museenkoeln.de/ns-dokumentationszentrum/default.aspx?s=333>, <https://museenkoeln.de/ns-dokumentationszentrum/default.aspx?s=335>; Bundeszentrale für politische Bildung: <https://www.bpb.de/themen/holocaust/erinnerungsorte/502992/ns-dokumentationszentrum-der-stadt-koeln-im-el-de-haus/>, [最終閲覧 2024 年 3 月 24 日]。
- (11) 以下の NS ドキュメンテーションセンター・ラインラント=プファルツについての記述は、特にことわりのない限り、著者が現地を訪れて確認した事実と次のウェブサイトの情報に基づいている。Bundeszentrale für politische Bildung: <https://www.bpb.de/themen/holocaust/erinnerungsorte/502996/ns-dokumentationszentrum-rheinland-pfalz-gedenkstaette-kz-osthofen/>; NS-Dokumentationszentrum Rheinland-Pfalz/ Gedenkstätte HP KZ-Osthofen: <https://www.gedenkstaette-osthofen-rlp.de/>; Förderverein Projekt Osthofen: <http://projektosthofen-gedenkstaette.de/index.php?page=11>, [最終閲覧 2024 年 3 月 24 日]。

- 
- (12) ドイツ労働組合総連合の傘下にある独立した青年団体
- (13) 以下の NS ドキュメンテーションセンター・ミュンヘンについての記述は、特にことわりのない限り、著者が現地を訪れて確認した事実と次のウェブサイトの情報に基づいている。Bundeszentrale für politische Bildung: <https://www.bpb.de/themen/holocaust/erinnerungsorte/503119/ns-dokumentationszentrum-muenchen/>, [最終閲覧 2024 年 2 月 24 日]; NS-Dokumentationszentrum München: <https://www.nsdoku.de/>, [最終閲覧 2024 年 2 月 24 日].
- (14) Bayerischer Rundfunk (2015. 02. 26): „Chronik. Der lange Weg zum Zentrum“ URL: <https://www.br.de/nachricht/ns-dokumentationszentrum-muenchen-vorgeschichte102.html>, [最終閲覧 2024 年 2 月 10 日].
- (15) Ebenda.
- (16) Knigge, Volkhard (2016): Das radikal Böse ist das, was nicht hätte passieren dürfen. Unannehmbare Geschichte begreifen. In: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, URL: <https://www.bpb.de/shop/zeitschriften/apuz/218716/das-radikal-boese-ist-das-was-nicht-haette-passieren-duerfen/>, [最終閲覧日 2023 年 8 月 27 日].